

編集後記



◇『産みの苦しみ』とは、よくいったもので、この『みずぐらいど』創刊号は、私の予想を越えた難産だった。もう少しスムーズに生まれるものと思っていたが、あにはからず、難行苦行が続いた。ただ、それには少しばかり訳があった。というのは、この冊子を、「市民に開かれた市史づくり」とするために、編さん・編集委員会と市民との交流誌にしようという意図から、通例の「市史研究」のスタイルをできるだけ破ろうとしたことに端を発していた。どんな内容にするか、あるいは編集レイアウトや全体の体裁の面からも、できるだけ親しめるものにした。市民が気軽に手にとって読めるものという方針から、私なりに工夫をこらしたつもりだった。

専門家だけにおまかせしていれば市史ができあがるというやり方ではなく、市史づくりが市民の間に幅広くひろがり、自分たちも参加してつくるのだという気運を盛りあげていくための第一弾として、この冊子をはなりたいという思いから、論文中心の「市史研究」のパターンをとらなかつた。ただ、市史編さん事業では、はじめて出す

刊行物という制約などもあって、調整が手間取ったというのが正直なところである。

◇「みずぐらいど」(水喰土)という誌名も、ギリギリまで決まらなかつた。「福生市史研究」という堅いイメージの表題はやめて、市民に親しまれる名称をつけたいと編集担当としては主張したが、それでは何とつけるかという段になると、編集委員会でもなかなか結論がでなかつた。結局は時間切れのようなかたちで、当初から提案していた私の案がそのまま誌名となり、名付け親になってしまったが、それなりの理由があつたのであることを理解願いたい。

◇「水喰土」という地名は、熊川の五丁橋付近から押島方向に向かって、青梅線と八高線との間にはさまれた窪地辺をさし、承応二年(一六五三)の玉川兄弟による玉川上水開さくの際に、その付近まで水がくると地中に吸いこまれてしまったという。そこでもう一度それより上部を掘りなおして現在の上水ができたという伝説がある。

失敗した堀ということだが、食べられた水は地下水となつて、先人たちの命と生活の水になつたにちがいない。「歴史は地下水となつて伏流する」といわれるが、私たちが目指す福生の歴史は、そうした歴史の地下水を掘りあて、埋もれた歴史を掘りおこすことなのではないか。人間の歴史には

誤まちも失敗もある。それを避けて通つてはなんの意味もない。その功罪を厳しくみつめてこそ、歴史を学ぶ意義があろう。

苦しんで生まれた子ほどかわいもの。ぜひ、皆さんと一緒に大きく育ててほしい。

◇『みずぐらいど』の原稿募集

市民参加の福生の歴史づくりにするためにも、市民の皆さんからの原稿を募集しています。「市民が綴る福生の歴史」は、そのために用意したものです。市史編さんへの意見や希望はもちろん、福生の歴史・文化・自然・地理・民俗など、どんなテーマでもかまいません。また、自分の体験したこと、自分史のようなもの、あるいは聞き書きなど、積極的な投稿をお願いします。

研究ノート、論文、史料紹介などにも、意欲的な投稿をお待ちしています。

また、表紙の写真や「一枚の写真」コーナーも、歴史的一瞬や市民の生活の姿がうつっている古い写真を探しています。昔のアルバムをもう一度開いてみて下さい。色あせた写真でも、複写をとりますので、意外に鮮明に出ます。ぜひ一報ください。ただし、採否は編集委員会で決定し、枚数を調整させていただきます。

◇編集担当は久保田昌希・新井勝紘。なお高牟礼毅・佐藤章夫・松野幸子の各氏に協力頂きました。多謝。

(新井勝紘記)

みずくらいど 創刊号 (福生市史研究)

昭和60年(1985)7月1日 発行

編集 福生市史編さん委員会

発行 ^{ふつ}福 ^き生 市
〒197 東京都福生市本町5番地
電話 0425(51)1511

印刷 株式会社 精興社
〒198 東京都青梅市根ヶ布1-385番地
